令和八年度　入学試験

国　語

問題冊子

注意事項

試験開始の合図があるまで、この冊子を開けないこと。

1　この冊子の本文は10ページまである。印刷の不明な箇所、ページの脱落などがあった場合は申し出ること。

2　解答は、問題ごとに、答案用紙（別紙）の所定の欄に記入すること。

3　答案用紙は、**その一**、**その二**、の二枚である。それぞれに、受験番号と氏名を記入すること。

記入例

受験番号	1
	2
	3
	4
	5
氏名	大塚　茶織

4　答案用紙の解答欄上部の点線枠内には何も記入しないこと。

5　この問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

1

次の文章を読んで、問(一)～(七)に答えよ。

岩波書店から２００３年に出版された新版『カント全集』の第15巻『人間学』（もしくは『実用的見地における人間学』）。その後半にカントの『人間学遺稿』も訳出されているのだが、その扉頁に「抄訳」とあるように、『遺稿』のすべてが訳出されているわけではない。エーリッヒ・アディックスの編集によるアカデミー版『カント全集』第15巻を底本にしているのだが、翻訳ではその第一部、第二部合わせて17の節が「省略」されている。第二部「人間学的な性格論」はＡからＦまで六節に区切られているが、そのうちのＤ「人種の性格」という部分も「省略」されているものの一つである。

他にも多くの「省略」があるので、特段「人種」についての記述だから省略されたということでは全くないのだろう。同時に、訳者解説や訳注のどこにも、それらの「省略」の理由や経緯は全く書かれてはいないので、それらはすべて訳されていないという点において平等ということになる。この件について岩波書店の編集者に問い合わせたが、20年前の仕事であり担当者もおらず、記録も残っていないので、訳さなかった理由もそう決定された経緯も確かめられないということであった。

理由はどうあれ、「人種の性格」という文章群が翻訳において「消され」、そこで展開されるはずだった人種に関するカントの知識（の一部）とカントが読者に提供しえた知識（の一部）が「無い」という事実は残る。

この事実だけならば、カントの人種に関するテクストが日本語においては人為的に「無い」というだけのことなのだが、この「無い」という事実によって、カントの人種論にアプローチできる道筋が逆説的に作られてしまう仕掛けが、この『全集』第15巻には仕込まれているのである。

それは訳者による注１１３。ここで訳者は、カントが「人種に関心が高かった」ことを示すために『人間学』以前に人種について論じられたテクスト群を紹介している。「さまざまな人種について」（１７７５年）、『人種の概念の規定』（１７８５年）、そして『哲学における目的論的原理の使用について』（１７８８年）である。

訳されてはいないテクストには何が書いてあるんだろう、それは本編とどのように関連付けられているんだろう。それは好

奇心か、知識欲か、単に欠落を埋めたいための興味関心かはともかく、対象物が「無い」以上、それに関連するとして与えられた情報に接してみようと導かれる読者もいるだろう。

そして、たとえば講義計画として構想された「さまざまな人種について」を手に取ってみる。このテクストにおいてカントは人間を、「自然の傾向」に合わせて第一人種から第四人種に分類している。しかしそれぞれの人種は、理想的かつ起源となる一つの「根幹種族（stem genus）」から派生して発生しており、それは「白くて柔らかいヒフ(a)、赤みを帯びた髪の毛、淡い青色の目」をした「ブルネット色の白人」で、ドイツの北部から東方アルタイ山脈付近にまで住んでいたという。要するに、基準となる外見と体躯（たいく）は白い北ヨーロッパ人だという、今どき三流の漫画でも書かなさそうなことを地理と気候風土に因果させて滔々（とうとう）と述べているのである。これは人種に関する話なのか、いやいや現代的な意味における人種ではなく生物学的表現型（phenotype）の記述に過ぎないのではないかという議論もあるだろうが、カント自身がはっきりと「人種（Rasse）」と書いている。

このテクストが書かれた九年前の１７６４年、カントは「美と崇高の感情に関する考察」において一人の黒人の大工のザレゴト(b)を評し、「要するにこいつは頭の先から足の先まで黒かったのであり、それは彼の言ったことが愚かであった明らかな証拠となる」と書いている。たとえ全集といえども、一冊の本への関心は一冊の中で完結させる読者が多いだろうし、もし第15巻で興味を惹（ひ）かれたことを第2巻にまで手を伸ばして調べた人がいたとすれば、(1)結果的にカントの人種論という一つの知のテーマの轍（わだち）を作ったことになるだろう。

「美と崇高」におけるカントの記述は、黒人の大工が愚かだと書いてあるから人種差別なのではなく、肌の色が黒いことが愚かさの証拠だという因果関係を普遍の真理だと確信しているかのように書いているから人種差別なのだ。アフリカ系アメリカ人の哲学研究者であるエマニュエル・エゼが、カントを始めヨーロッパ啓蒙期（けいもうき）の哲学者たちのアンソロジーを編み、彼らがいかにして理性と文明を白人ヨーロッパ人に分類し、非合理と野蛮をヨーロッパ外の有色の人々に分類することで、「人種」を知の対象として記述し生み出していったかを示したのは１９９７年のことだった。つまり、新版『カント全集』が出版され

た２００３年時点において、一方で世界市民的な社会を構想していたカントが、他方で文明と野蛮という対立の公式の中で人間を分断してしまう「人種」をア・プリオリとして考えていたということは、はっきりと知られていたということになる。

しかし、「人種に関心が高かった」カントが人種差別に基づいた認識によって人間を、より正確には「人間の性格」を考察していたという事実は、カントを哲学者としての評価の土俵から追い落とすものかといえば、決してそうではない。そうしてしまうと、(2)哲学という領域の無垢さや非政治性を逆説的に作り上げてしまうことになるからだ。むしろ、啓蒙哲学の文字群と思考とはそんなものだという理解を出発点にすべきなのだ。問われているのは過去ではない。現在の私たちの読み方である。(3)「そんなもの」だから真剣に取り扱わないということではない。むしろ逆だ。だからこそ、真剣に対峙し検証しなければならない。カントの哲学的言説における人種差別に目をつぶることは無知化（なかったことにする）であり、まるでそれがなかったことであるかのようにカント哲学が云々と講釈を垂れることこそ一見無知の再生産に見える。しかし、この短い文章で明らかにしてきたように、その実が逆になる可能性がそこかしこに満ちている。人種に関する記述が「無い」ことが、ではどこに「在る」のかを探る知の旅を始める起点になるからである。

カルチュラル・スタディーズは、言葉と物、理論と実践、自然と文化、知と無知といった区別を当然視せず、それらの区別化がどのように起きているのかを批判的に問う作業である。

経験則として実証できない本質は理解することができないという不可知論がある一方で、その真逆として、観察可能な経験的事実のみを対象としているにもかかわらずそれを普遍として認識することを迫る知的(c)エイイが「科学」と名付けられたならば、(4)結局「科学」は巨大な不可知論と裏表の関係でしかなくなってしまう。科学のカルチュラル・スタディーズはそこでオチをつけずに、ではどのような知が何を科学とし、何を非科学とするのか、この二項対立には収まらない領域のスペクトラムの力学自体を問い続ける作業も担わなければならないのだろう。

人種は幻想であるとか人種の存在は科学的に証明できないとか、人種差別の無根拠さを強調するためにたびたび目にするこのような言説は、(d)諸刃の剣である。人間の他者認識を固める資源はそれが幻想か現実かを問わないからだし、人種は今のとこ

ろ科学的に証明されていないだけだということになってしまうからだ。万が一科学的に証明されたら、人種は「在る」ということになる余地を残してしまうからである。

「頭の先から足の先まで黒」いことを愚かさの証拠として科学的に証明しようとする「プチ」カントたちが歴史上たくさん存在してきた。人類学、優生学、犯罪学、医学、社会進化論は言うに及ばず、植民地主義を後押しする哲学、文学、歴史学、経済学、地理学の各分野で、そもそも優勢な者たちに合わせて作り上げた基準で優劣を計るという倒錯(e)がヒンパンに行われてきた。(5)あらかじめ他者を消すつもりで他者性を捏造(ねつぞう)してきたと言ってもいいだろう。

ある思考の起源として崇拝されるものは、それを崇拝するものよりもはるかに先を行っていることが往々にしてある。カントは、地球以外の惑星に住む理性的な生物を想定し、もしそのような生物たちがいるならば、「地球に住む一つの種として」「人類を人種と呼ぶことができる」と言う。この惑星的なコスモポリタン的思考と「黒」認識は完全に矛盾したまま一人の哲学者の内に留まるのか、それともどこかで昇華されるのか、それともこの二つが矛盾するとは読み取らず、カントはそれぞれの視座から別のものを見ていたと理解するのか。これを考えるためだけにでも、カントを人種差別主義者だと切り捨て、あんなやつのことは知らなくてもいいという無知の領域に押し込めてはならないのだ。

（小笠原博毅「カントの『黒』」により、一部省略・改変して用いた。）

注

○カント―イマヌエル・カント Immanuel Kant（一七二四～一八〇四）。哲学者。
○エーリッヒ・アディックス―Erich Adickes（一八六六～一九二八）。哲学者。
○底本―翻訳の際に元にする本。
○ブルネット―褐色がかった色。
○アルタイ山脈―中国、モンゴル、ロシアにまたがる山脈。
○エマニュエル・エゼ―Emmanuel Chukwudi Eze（一九六三～二〇〇七）。本文中で言及されているアンソロジーは『人種と啓蒙主義（Race and the Enlightenment）』。
○ア・プリオリ―議論や知識が経験に先立つこと。
○カルチュラル・スタディーズ―文化事象が社会、政治、経済等の特定の歴史的状況下で構築される過程を研究する学問分野。
○スペクトラム―境界が明確ではない状態が連続していること。

問㈠　傍線（1）「結果的にカントの人種論という一つの知のテーマの轍を作ったことになる」とあるが、これはどういうことを述べているか説明せよ。

問㈡　傍線（2）「哲学という領域の無垢さや非政治性を逆説的に作り上げてしまうことになる」とあるが、これはどういうことを述べているか説明せよ。

問㈢　傍線（3）「『そんなもの』」が指す内容について説明せよ。

問㈣　傍線（4）「結局『科学』は巨大な不可知論と裏表の関係でしかなくなってしまう」とあるが、なぜそのように言えるのか説明せよ。

問㈤　傍線（5）「あらかじめ他者を消すつもりで他者性を捏造してきた」とあるが、これはどういうことを述べているか説明せよ。

問(六)　波線「あんなやつのことは知らなくてもいいという無知の領域に押し込めてはならないのだ」とあるが、あなたは具体的にどのようなことを「無知の領域に押し込めてはならない」と考えるか、そう考える理由とともに説明せよ。字数は三百字程度とする。

問(七)　傍線（a）～（e）の片仮名を漢字に直し、漢字は読みを平仮名で記せ。

2

次の文章は、後鳥羽院に仕えた作者が、院の身辺の出来事を綴った日記である。これを読んで、以下の問㈠～㈤に答えよ。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

（『源家長日記』により、一部改変して用いた。）

注　○殷富門院の大輔、讃岐、三河の内侍、丹後、少将―女性歌人の名。　○うけたまはりつめて―絶えず言い付かり続けて。　○七条院―後鳥羽院の母。　○重代―代々の歌人であること。　○歌のおく―巻物の末尾。　○師光入道―歌人。　○家のかぜ―家の伝統。　○三位入道―藤原俊成。歌人。　○ふたば―幼少期。　○きほひたるさま―張り合っているようす。　○あはつけし―うわついている。

問(一)　傍線(1)を、「さる人」の指すところを明らかにして現代語訳せよ。

問(二)　傍線(2)は、どういう状況であるということか、その理由とあわせて説明せよ。

問(三)　傍線(3)は、何についてどのように思っているのか、説明せよ。

問(四)　傍線(4)を、主語を補いつつ現代語訳せよ。

問(五)　二重傍線(a)～(c)について文法的に説明せよ。

(例)完了の助動詞「たり」の連用形

3

次の文章を読んで、問(一)～(四)に答えよ。

楚人居レ貧、読二淮南方一、(ア)得三螳螂伺レ蝉、自ラ障レ葉可二以テ隠一レ形ヲ。遂ニ於テ二樹下一ニ仰ギテ取レ葉ヲ。螳螂執(1)リテレ葉ヲ伺レ蝉ヲ、以テ摘レ之ヲ、葉ハ落ツ二樹下一ニ。樹下ニハ先ニ有リ二落葉一、不レバ能ハ(2)ズ復タ分別スル、掃キ取リテ二数斗一ヲ帰ル。

一一以テレ葉ヲ自ラ障ヒ、問ヒテ二其ノ妻一ニ曰ハク、「汝(3)ガ見ルヤレ我ヲヤ不ト。」(イ)妻ハ始メノ時ハ恒ニ答ヘテ言フ、「見ユト。」経テレ日ヲ乃チ厭ケンシテレバ倦ミ不レ堪ヘ、紿キテ云フ、「不トレ見エト。」嘿ゼントシテ然イニ大ヒニ喜ビ、齎チテレ葉ヲ入リレ市ニ、対シテ面取ルル二人ノ物一ヲ。吏ニ遂ニ縛ばくシテ詣いたルレ県ニ。県官受ケレ辞ヲ、自ラ説カシム二本末一ヲ。官(ウ)イニ大ヒニ笑ヒ、放チテ而不レ治メ。

（『笑林』による）

注

○楚―地名。湖北省のあたり。　○淮南方―淮南王劉安が編んだ書物。
○螳蜋―カマキリ。　○伺―ねらう。
○斗―容量の単位。約一・九八リットル。　○厭倦―あきあきする。
○嘿然―だまっているさま。　○対面―人の目の前で。
○縛―しばる。　○県―県の役所。　○辞―報告。訴状。
○本末―いきさつ。　○放―釈放する。　○治―罪を問う。

問(一)　傍線(1)「執」、(2)「復」、(3)「汝」の読みを記せ。現代仮名遣いでよい。
問(二)　傍線(ア)「得螳蜋伺蝉、自障葉可以隠形。」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名遣いでよい。
問(三)　傍線(イ)「妻始時恒答言、『見。』経日乃厭倦不堪、紿云、『不見。』」を現代語訳せよ。
問(四)　傍線(ウ)において、県官が大笑いした理由を、本文全体をふまえて説明せよ。